

書評

科学技術文書の作り方

宮川松男監修 氏家信久著

本書の監修者、著者はともに鉄鋼協会欧文会誌の編集委員を務められ、とくに著者の氏家氏は長年にわたり会誌の英文を校閲くださり、記事内容の向上に多大の貢献をいただいた。本書はそのような貴重な経験にもとづき、日本人技術者の陥りがちな弱点がよく把握されており、わかりやすい科学技術文書の作り方が示されている。とくに大きな特徴は優れた英文原稿を書くためには、まずもとになる和文原稿の構成と内容がしつかりしたものでなければならないという独自の観点にあり、類書を見ない著作となつている。したがって欧文を書く前に、また翻訳にわたす前に本書に書かれたことを十分に吟味してみることをお勧めしたい。

私たちが英文を書く時に最も気にするのは文法上の誤りではないだろうか。しかし意味を取りちがえる危険性のある基本的な誤りは別として、読者はそのような誤りはたいていわかる。そして興味のある内容であれば、終わりまで読んでみようという気になるものである。ところが文法上の誤りはないが、全く支離滅裂でどうにも理解できない原稿によく出会う。これはとくに、native speaker に翻訳してもらつたものに多いようである。つまりもとになる和文原稿の問題なのである。

本書は、なぜよい文書を書く力が求められるか、ど

んな文書を作成すればよいかを事例にしたがつて明快に説いていく。その中で必要特性(六大徳目)として、論理性、客観性、完全・簡潔性、独創性、信びよう性、説得性が浮き彫りにされる。鉄鋼協会欧文会誌では、原稿作成のチェックポイントとして7Cを挙げている。内容の適切な伝達のために、表現は clear, coherent, concise, concrete, and correct, 構成は complete and courteous であるように勧めている。これは本書の主張と揆を一にするものである。

よい文書の作り方の王道はない。しかし「書くことは考えること」といわれるように、よい文章を書くことはよく考えることである。読者の立場に自分をおいて考え、よくわかつてもらえるように文章を練りあげる。こうすることで、思考を体系化・客観化でき、文書を注意深くかつ批判的に読む力が養われるという利益は、研究者・技術者にとって大きな財産となろう。しかもそのように注意深く書かれた文書は著者の分身として、有効に働いてくれるのである。

著者はまた本誌に連載記事 [Vol. 67 (1981), 200; Vol. 72 (1986), 339, 519, 878, 1403] として『良い英文を書くために一論文を英語で書くこつ』を執筆されている。これもあわせて参考にして、多数の本誌読者が貴重な成果を簡明な英文に表現し、国際的学術誌として充実・飛躍しつつある姉妹誌の欧文会誌に投稿されるのを歓迎する。(松尾宗次)

A 5判 114 ページ 定価 2000 円

1986年6月 朝倉書店発行

編集後記

恒例の春の講演大会のプログラム編成が終わり、ほつとしていきます。今回は前回に比べ60件ほど少なくなつたものの670件の一般講演が寄せられました。鉄鋼技術が成熟期に到達したため、発表件数が少なくならないかと心配しておりましたが、会員諸氏のたゆまざる研究開発の御努力の御陰により、このように多数の発表が寄せられたものと感謝しております。また、春の講演会の申込みメ切りは1月8日であつたため、年末年始の休日を準備にあてられた方も多いと思いますが御苦勞様でした。最近では従来の鉄鋼技術の報告が減少し、萌芽領域の報告が増えつつあるものの、まだまだ鉄鋼技術の研究は急に減少することはないと思つています。今後共、会員各位の御努力を期待致します。

さて、論文投稿の方は幸い、多くなつており、掲載までの時間がかかるため御迷惑をおかけしているものと思つています。論文の査読をしていると、最近ではワープロで書いて(打つて)寄せられる方も増えてきている

のに気付きます。ワープロの字はきれいで読みやすいのですが、中に、文字間隔をあけて打つてこられる方がおられます。これは当協会の原稿用紙のマス目にならつて打たれたものと思つています。この場合、字の間隔がはなれすぎ、読みづらくなりますので文字間隔も適当な大きさにして下さるようお願いいたします。

私も、修正が容易であるためと字が下手なため、ワープロを愛用しています。この点、ワープロは優れているのですが、原稿を読む方からすると多少字がまざくても肉筆の方が読んでいて何か、執筆者との触れあいを感じるように思えます。今後、ワープロ化は時代の流れで進むものと思われませんが、最近ではまた、修正箇所の表示が協会の美しいお嬢さん方の手書きであつたものが、堅苦しいワープロになり、執筆者の方々に冷たい印象を与えているのではないかと余計な心配をしています。(K. A.)